「沖縄キャンプ」の実践を通して

――フィールド・エデュケーション，生きた現場からの学びの大切さ――

佐藤　一宏

はじめに

“キリスト教精神に基づく教育”を建学の精神に謳う立教大学は，伝統的に課外教育活動を積極的に実践してきた大学です。

特にフィールド・エデュケーションとして位置づけられるいくつかのキャンプは，自らの「生き方」を模索する学生たちが，様々な社会に生きている人々から学ぶ貴重な機会として続けられてきました。こうした活動は，他大学には見られない立教大学独自の活動と言うことができます。

今回は，17年間にわたりハンセン病療養所「沖縄愛楽園」で実践されてきたチャプレン室主催の沖縄キャンプを例にとりながら，この種の課外教育活動が，なぜ立教大学の特色と言えるのかを考察してみたいと思います。

沖縄キャンプの概要

立教大学がハンセン病療養所「沖縄愛楽園」でキャンプを行うようになったきっかけは，元立教大学チャプレンの大郷博氏が1968年，大学生の時に，愛楽園を自ら訪ねたことに始まります。

初めて愛楽園の方々と出合った時，その人々の生き様を前にして，自分の人生を問い返された気持ちとなり，大郷氏は愛楽園に通い続けました。その後，大郷氏は立教大学チャプレンに就任されたのですが，愛楽園へ学生たちを連れて行って，そこに生きる人たちとの関わりの中で人間的な成長を考えていく教育プログラムを始めたのが1981年のことでした。以来，17年間にわたって続けられてきました。

現在，沖縄キャンプには15名の学生と３名のスタッフ（責任者のチャプレンと職員２名）が参加し，療養所内の面会宿泊所に宿泊し，自炊生活をしながら，別紙のようなスケジュールで一週間を過ごします。

日中は入園者の方のお宅を訪ね，お茶菓子をごちそうになりながらお話をお聞きしたり，沖縄料理を習ったり，海辺を一緒に散歩したりします。そして，夜は参加者全員でミーティングを行い，それぞれが気づき，感じていることを語り合う時間を持ちます。

ハンセン病を背負って生きてこられた方々とほんの一週間ですが，生活をともに体験させていただく中から，一

緒に参加した学生同士が想いを共有し合うことができるようにプログラムが作られています。また，学生同士が互いを知り合うために，事前の準備会を3～4回実施します。そして，一週間の愛楽園滞在が終了した後，すぐ解散せずに，那覇市郊外の宿舎で，じっくりと愛楽園での体験をふりかえり，共有するための時間を取っていることも沖縄キャンプの中では重要な意味を持っています。

ハンセン病について

ハンセン病は，現在では完治する病気ですが，約50年前まで治療薬が見つからなかったのです。病気が悪化すると，顔や手足に変形を残すため，多くの差別や偏見にさいなまれてきました。

明治42年に制定された「旧らい予防法」によりハンセン病者は，療養所へ強制収容され，亡くなるまで社会から隔離される非人道的な政策が90年間にわたってとられてきました。

1996年らい予防法廃止法が成立。しかし，全国のハンセン病療養所に入所している約5,500名の平均年齢は70歳を超え，年々高齢化の一途をたどっています。入園者の多くは家族と縁を切ったり，断種の手術を受けたため，頼るべき身寄りがないのが現状です。らい予防法廃止法では，引き続き，療養所に留まらざるをえない人々に対して，生活・医療・福祉等のサービスが受けられる保障が謳われています。社会のハンセン病に対する差別感情をなくしていくことは，まだまだこれからの課題として残っているのです。

沖縄愛楽園について

ハンセン病は暖かなところに多く見られる病気で明治末期頃は，沖縄が多発地帯でした。政府は沖縄に療養所を作ろうとしたのですが，住民の猛烈な反対にあい，どこにも作ることができませんでした。当時の病者は，海岸の洞窟や墓地に住むなど，想像もできないくらいに悲惨な生活を送っていました。

沖縄本島北部の屋我地島にある愛楽園は，自らも病者であった日本聖公会の伝道者，青木恵哉（けいさい）氏を中心に病者が自らの手で作ったハンセン病の療養所です。病者が療養所を作ったというのは世界中でも愛楽園だけと言われています。

もう一つ，愛楽園の特筆すべきことは，病気の苦しみだけではなく，沖縄戦に巻き込まれ，薬や食糧が米軍のたび重なる激しい空襲でほとんど消失したことにより，充分な治療が受けられなかったり，栄養失調で，病気や後遺症が一層ひどくなった入園者が多かったことがあげられます。

現在，入園者は518名。平均年齢は約70歳。園内の約半数の方が信徒である日本聖公会「沖縄祈りの家教会」が立教の受け入れ先となっています。

沖縄キャンプの特色は，入園者のお宅を訪ねる「居室訪問」と夜の「ミーティング」にあると言うことができま

1996年度　沖縄キャンプスケジュール表

	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1
2/26(水)	羽田集合		JAL901（機内）		那覇到着	バスで移動	昼食	愛楽園到着	沖縄古典芸能鑑賞		自由時間		歓迎夕食会			ミーティング		就寝	
2/27(木)	起床	朝食	木曜礼拝に参加	愛楽園巡りと居室訪問		昼食	海岸清掃		園長先生のお話		自由時間	夕食	ふりかえり			ミーティング			就寝
2/28(金)	起床	朝食	盲人会で新聞朗読と居室訪問			昼食	海岸清掃		居室訪問		自由時間	夕食	ふりかえり			ミーティング			就寝
3/1(土)	起床	朝食	盲人会で新聞朗読と居室訪問			昼食	海岸清掃		居室訪問		自由時間	夕食	お通夜に出席			ミーティング			就寝
3/2(日)	起床	朝食	日曜礼拝に参加		葬送式に参加	昼食	無言の探索を実施		居室訪問		自由時間	夕食	ふりかえり			ミーティング			就寝
3/3(月)	起床	朝食	盲人会で新聞朗読と居室訪問			昼食	海岸清掃		居室訪問		入園者のお宅で夕食会		お通夜に出席			ミーティング			就寝
3/4(火)	起床	朝食	葬送式に参加	宿舎等の清掃		お別れ昼食会	愛楽園出発	バスで移動		宿舎着	バスで移動	宜野湾の津留司祭宅で夕食会			宿舎着	自由時間			就寝
3/5(水)	起床	朝食	バックフィードバックの実施		自分への手紙を書く		那覇市内で昼食		首里城見学と国際通り自由行動		宿舎着	夕食会			自由時間・就寝				
3/6(木)	起床	朝食	最後のふりかえりを書く		最後のミーティング	移動	最後の昼食会	解散											

すが，それらについて，次に説明してみたいと思います。

愛楽園の方々と出合うこと

社会や親戚との関わりが非常に限定されている愛楽園の方々は，毎年春に立教の学生が訪ねて来るのをとても楽しみにされています。まるで，自分の孫が訪ねて来るのを待つかのように，ジュースやお菓子をたくさん用意して心待ちにされている方がたくさんいらっしゃいます。

学生たちは愛楽園の方々と出合い，話をしていく中で「ハンセン病を背負って生きてきた人たちにしか持てない力」を感じ，それに触れていくことで自らの心を大きく揺り動かされていきます。

愛楽園の方々は，病気や戦争などの体験を通して，その人にしか語ることのできない話を惜しげもなく学生たちに話してくださるのです。

「自分がハンセン病だとわかった時は信じられず，何万回も神様に祈ったよ…。それでも病気が悪化し，日に日に醜くなる自分が嫌でたまらなくて，何度も死のうと思ったけれど，死にきれなかった。もうどうしようもなくて，

醜くて，嫌でたまらなかった自分をやっと認めることができた時に，人間としての自分の人生が始まったと思っていますよ…」と。

愛楽園の方々の人間的な優しさや温かさの背景に，実は差別され，蔑まれてもへこたれずに人間として生き抜いてきた歴史があるのだということに少しずつ学生たちは気づいていきます。

そして，愛楽園の方々に接していくうちに，学生たちには自分の良いところも，嫌なところも含めた「あるがままの自分」が見えてきだし，自分の中に変化が生まれてくるのです。

参加者同士が出合うこと

沖縄キャンプに参加してくる学生たちも，思い思いの参加動機を胸に抱えています。それはその学生たちが，自分の人生をどう生きていこうかと真剣に考えていることから発っせられているのです。そうした学生たち一人ひとりが出してくるエネルギーが，ぶつかり合ったり，励まし合ったりする場が夜のミーティングです。一週間のキャンプ期間中に合計6回のミーティングが行われますが，最初と最後ではまるで違ったものとなるように，グループの関係性は深まって行きます。

沖縄キャンプのミーティングには，マニュアルなるものはありません。毎日，各自が書いたふりかえりを全員分コピーして配付したものを必ず読んでおくことと，夜9時になったら，全員がミーティングの部屋に集まるということぐらいが約束事でしょうか。

そして，あらかじめ設定されたテーマがあるわけではなく，また，司会者がいるわけでもありません。つまり，台本がないので，どのようなものになるのかは，その夜のミーティングが始まってみなければわからないという不安に似た気持ちがあるのも事実です。

これらはＪＩＣＥ（立教大学キリスト教教育研究所）が人間関係トレーニングで実践しているＴグループ（トレーニンググループ）やエンカウンターグループのミーティングの流れを組んでいると言うことができると思います。

それは“今，ここ（愛楽園）で”起こっていること，つまり，今，その場で話し合っている時に（沈黙の時も含めて）参加者一人ひとりの心や体の中で，あるいは参加者相互間で，時には学生とスタッフの間で起こっていることが気づきや学びの素材となるということです。

そこにいる人を心や感情を持った人として，あるがままに受け容れていくこと，共感的に人を理解するという視点を大切にしながら，ミーティングは行われていきます。

沖縄キャンプのスタッフ

沖縄キャンプのスタッフの役割を端的に言えば，参加した学生たちが愛楽園の方々と，そして一緒に参加した学生たちとしっかり向き合えているかどうかという点に自分の気持ちを向けることだと思います。スタッフは，学生

たちの毎日記すふりかえりやミーティングでの言動などに最大限，関心を寄せながら生活していきます。

しかし，スタッフは何かを積極的に教えるのではありません。スタッフも沖縄キャンプの人と人の出合いの中に身を置きながら，学生たちを援助促進していく存在と言うことができます。

参加した一人ひとりの学生がしっかりと愛楽園の方々や自分自身と向き合うことができるように，時には全体に問いを発しながら，時には一人の学生に積極的な関わりを求め，スタッフも学生たちとともに苦しみや悲しみ，そして喜びをともにしていくのです。

沖縄キャンプのスタッフには，何度かキャンプに参加し，愛楽園の歴史や入園者の生き方に触れ，なぜ愛楽園でキャンプを行うのかというこだわりを持っている者が入っていなければ成り立ち得ないのも事実だと思います。また，人間関係についての知識とスキルを身につけた者が入り，関連したプログラムを実践することによって，より一層学生たちは体験を深めていくことが可能となります。

沖縄キャンプのスタッフが他のキャンプのスタッフに比べて，一人の人間が数年間担当するのには，このような理由があるからなのです。

人間のあり様について体験的に学ぶ貴重な機会

沖縄キャンプは「人と人との関わり」を通して，人間としてのあり様を学ぶことをねらいにしています。

人間関係の探求には「人のこころ」の理解が不可欠です。

沖縄キャンプは，「私」や「あなた」というこころの動きに焦点を当てた学びの機会であると言うことができると思います。別の表現をすれば，単なる知識の伝達ではなく，自分自身の「人間形成」に密接に繋がることを学んでいるのです。

沖縄キャンプを一言で表現することはとても難しいと感じています。あえて表現するならば「ハンセン病」という重荷を引き受けながらも精一杯人間らしく生きてこられた愛楽園の方々の「本物の優しさ」を通して，学生たちがあるがままの「自分自身」を受け容れることを実感していくことではないかと思っています。

愛楽園の方々は「転んでもそのたびに起き上がり，前を向いて生き抜いてきた人たち」と言うことができます。彼らとの関わりを通して，学生たちは自らの人生を自分なりのやり方と速度で歩んでいって良いのだという勇気をつかみとっていくのです。

一方，「ハンセン病になってから，自分がどのように生きてきたかを学生さんに話すことによって，自分たちのこれまでの人生が，これからの社会を担っていく若い人たちの手助けになるのならば，『人間』としてこんなに嬉しいことはないよ…」と愛楽園の入園者の方々は語ってくださいます。

愛楽園の方々の心の中に立教の学生

たちが生き…，立教の学生たちの心の中に愛楽園の方々が生きていく…，それは，まさに「自らの人生の中に他者が生き」「他者の人生の中に自らが生かされる」ことをさしています。そして，そのことこそが「共に生きる」ことであり，まさに人間性教育の原点だと思います。

体験的学びの必要性

沖縄キャンプの学びは，まさに“体験”してみることにあると言うことができます。

人と人との関わりの大切な部分をしっかりと意識化すること。一度，「こころと体」で覚えたものは，そう簡単には忘れないものです。

沖縄キャンプは今年で17年目を迎えます。ここまでよく続いたものだと思う反面，学生たちはますます沖縄キャンプを必要としている昨今であると実感しています。

最近の学生の特徴には，

・学生同士群れたがる。
・自分に対してはもちろんのこと，他の学生への関心も強いが，それを素直に表現できない。
・現在の学生はとても多忙である。忙しくすることで，じっくりと考えることから逃れているように見える。
・周囲の目を気にして，自分の想いを言えない学生が多いとともに，みんなと同じ行動することを望む，という点に見ることができるように感じています。

これらに共通することは，最近の大学生の「自分探し」への欲求と「人間関係の希薄さ」ではないかと思っています。

多くの学生たちは，中学，高校と厳しい受験勉強の中で「自分とは何者なのか…」「自分はどう生きていけば良いのか…」など，本来ならば思春期に充分な時間をかけて，自分なりのやり方で，悩みながらもいろいろと考えることを一時的に棚上げせざるをえなかったのです。つまり，試行錯誤しながらも様々なことを体験する機会が絶対的に不足していると言えるのです。

最近の大学生の特徴の背景には，そうした事情が大きな影響を与えていると思います。

学生は遊んでばかりいて勉強をしないという批判をよく耳にしますが，一方で自らの大学生活が高校までの生活では叶えられなかった「自分探し」を実現し，それまでの「人間関係の希薄さ」を取り戻す場になることを期待している大学生が思いの他，多いということも立教大学という現場を通して私は実感しています。

沖縄キャンプをはじめとする立教大学が展開しているフィールド・エデュケーションは「体験学習」的な学びであると言うことができます。

自分や他者に直接関わる体験の絶対的な不足を沖縄キャンプの体験で補い，逆に一人ひとりの学生の体験に潜む広い意味での法則の理解や知的関心を大学で展開されている様々な講義で深め

ていくことができれば，大学が大学生にとって，もっと魅力的な学習の場になっていくに違いありません。

つまり，参加した学生たちにとって，キャンプだけの体験に留まらずに，その人の中でその体験がさらに広がりや深まりを持っていくということです。

「概念学習」中心の日本の学校教育の中で，沖縄キャンプの体験は非常に主体的な学びの機会であると言うことができます。つまり，参加した学生たちは，人間関係の理論について学ぶのではなくて，「私自身」の実際の人間関係を沖縄キャンプでの体験を通して学んでいくのです。

「概念学習」では学ぶ人を受け身にしてしまいがちですが，沖縄キャンプでは，頭の中だけではなく，「こころと体」を使って考える能動的な学びをしていると言うことができます。

樹木で言えば，外見の枝葉を茂らせるのではなく，根っこをしっかりと養っていくことだと思います。根っこがしっかりしていれば，困難に出合っても倒れることなく，自分で考え解決していくことができるはずです。

最近の大学生が自ら考えることが不得手であることを思うと，ますますこうした学びの機会は必要とされていると感じています。

立教らしい教育をよりいかすために

フィールド・エデュケーションと言われるキャンプを立教大学は現在，沖縄キャンプをはじめ５つ有しています。

このようなフィールドを持っているということは，立教大学にとっては大きな財産だと思います。お金で買えるものではありませんし，何よりもそれぞれのフィールドに生きてこられた方々と立教大学の学生たちの双方によって，長い間かけて築き上げられてきたというところに価値があります。

これらのキャンプがヒューマンリレーションズ・キャンプと呼ばれているゆえんもこの点に象徴されていると思います。

ハンセン病療養所をはじめ，どのフィールドに生きる人たち誰れもが非常に厳しい現実をしっかりと引き受けながら生きている人たちです。人間として，明るく，強く生きている人たちなのです。自らの生き方を真剣に考えようとしている学生たちがそういう人たちに出合うことによって，大切な何かをもらって帰って来ます。そして，その何かに自分なりにこだわりながら，自発的に自らの力で納得して自分が変化していくこと，そこにこそ本当の意味での人間的な成長があると言えるのです。

ところで，21世紀は「共生の時代」，そのキーワードは人間の「こころ」と「人間関係」であると言われています。

今でこそ「共生」という言葉が頻繁に使われるようになりましたが，立教大学ではそれに遡ること約20年も前の沖縄やフィリピンのキャンプが誕生した1980年ごろから，「共にある」とい

うことがねらいに据えられ，その実践が今日まで続けられてきたのです。

昨今，他大学が「大学冬の時代」を迎え，生き残りをかけて，建物施設などのハード面だけではなく，ソフト面の充実，特に人間の「こころ」と「人間関係」に着眼し，プログラムの開発に躍起になっています。しかし，現在の立教大学は前述した，立教独自の特色と言えるものまでも，一様に合理化を進めているように私には思えてなりません。

そのような流れの中で，フィールド・エデュケーションに対する正しい理解と評価がなかなか得られず，継続していくことが次第に難しい状況になりつつあります。

もちろん主催する側も，実施期間，場所，内容そして経費節減等について，現実に即した検討をしていく努力が必要なのは当然です。

私は，約10年間にわたって，学生部主催の「環境と生命」や農業体験，新入生キャンプ，オーバーナイト・ハイキング等，各種の課外教育活動を担当するとともに，チャプレン室主催のフィリピンや沖縄キャンプのスタッフも担ってきました。

また，国内研修制度を利用して，「ヒューマン・スキルの向上と課外教育を担当するスタッフに必要な知識と実践力」を身につけるため，1995年4月から約1年間にわたり，南山短大人間関係研究センターの客員研究員として研修を受けてきました。

その経験からも，今後は一層，大学という教育機関において，生きた現場での学びの必要度が増してくると感じています。

そして，これまで以上に正課教育との協力関係は深まっていくとも思っています。

その意味からも，学内に様々な課外教育活動の情報を集約し，それを担う部局を作り，そこが中心となってこれまで以上に，立教大学の特色であるフィールド・エデュケーションを含む課外教育活動を有機的，総合的に展開していく必要性を強く感じています。

今後は，全カリ総合B群の科目や理念が重なり合うコミュニティー福祉学部あるいは教職に就きたい学生が学ぶ教職課程との協力体制を積極的に模索していくことも面白い試みだと思います。

それは，単なる業務の効率化という観点からだけではなく，多くの学生たちが，正課教育と課外教育活動をしっかりと関連させながら学んで行きやすい環境を整えることにも繋がるからです。

そうした試みは，最近の学生のニーズに合致するだけではなく，知性・感性・身体のバランスのとれた真の意味での立教の教育を具現化するものであり，まさにリベラルアーツの実践だと言うことができます。そして，このような活動を展開している大学は日本広しと言えども立教大学以外には見当たりません。

上記の視点を踏まえながら，私は今，立教大学におけるフィールド・エデュケーションをはじめとする課外教育活動を再評価してみる時期にきていると思います。

チャペル，学生部，学生相談所，就職部などがこれまでの理念やノウハウを持ち寄りながら，どのようなものが考えられるのかを早急に検討し始めることができるよう総長はじめ上層部の英断に期待したいと思います。

「教育は人を育てること」と言われます。

沖縄キャンプをはじめとする様々なキャンプに参加した学生たちが，それぞれの個性を生かしながら，今生きている場で，培ったものをベースにしながら人間らしく学生生活を送っていくこと，そこに立教大学がリベラルアーツを実践する大学たりうる大きな意義を見いだせると思っています。

フィールド・エデュケーションを中心とする課外教育活動は，立教大学の貴重な財産と言うことができるのです。

最後に，この伝統と灯火を絶やすことのないよう，学生たちのために良い仕事を創り続けて行きたいと思います。

(さとう　かずひろ　本学学生部職員)